# うゑの安方君伝 第三輯 四

へ13
1305
17

特
へ13
1305
17

# 源平和合忠義傳第三輯巻之四

東都　松亭金水編次

## 第十七回

寒士和漢の珍器を駁く
媛が謀計その國を當る

かくて此処へ入来る媛い年齢三十八九。少し萎びたれども。色白くして眼清く。その容りを見も。気高くして衣服より髪の粧ひ。常のごとくにあらず。一辯ありと見えたり。徐ろに母が傍へ。心地いかゝ如何ぞ在さるや。兼ねてより憶も。未ませる人の治療ゆえ。三郎も病の怠りなきまでに毎夜ゆ治療一憑

この人と。おゝ在さるその賓客よ。初めて見えまゐらせ。妾八十代田平商

ゆが。濃ゆゝ名を耶麻と呼ぶ。今日不図も矛と母の病苦を救ひのありしる。

秘び出ひ来りしなり。と叮嚀ゆ今教さるとぞ。近平跋巡て額著ぐ在下隨き

業を満さ汝も時に取りての大幸にて備より憶ハ図らざる。款待に供ふ。
竊く存ずるなり。其の母君が病著ハ全く若子の遥ありし城砦ふ所為
那しくその根ハ浅しと必人のこゝさへまた若くも在さぬ由急御悩こそ只に似給
ど今少し治療あらバ怠りまする人ハ疑ひなし。心配なしのへぞ。と
療治なれバ良半時なりかして晩稲ハ痛さの速かしくて床の上に起直る。
備ゆへ胸の苦しさに物も言さて侍りしが。和君の術の功者なる。椽のごとく心張ま
語し。胸ハ究悪束ねする術のやうになりけるぞや。かくてハ畏の悩こそもわれ全
和君が賜なり。我こそハ労をもすひけれ。喃耶麻媛賓客殿を彼処へ伴ひまゐら
して歓待せまほしいやを喚。出来此方へと耶麻媛が侍女どもに雪洞燈さし誘
室見ハ辞し立もあへず心言んやう。備にも太き饗應に酒も逍し腹も充く今
さら何をか賜りしん。在下も昨夜より此の雨に迷ひて渾身さへ労れて

此へば額より頬に越こゝしども少て耶麻媛らず領き我もあらん由欲も困るに
語せるハ薦め来しせん我のみか母が病も既止がくて侍るまでハ此労へ来まじ在宴奈
一杯献らんと切にいまよて我のことゆへ辞し難げ。されバとてそれに後に著て二間なる
奥を往けるに此処ハかの耶麻媛が子舎の裡と覚しくて雄士とのみハ更になく侍
女婢女として定むる者十四五個にも餘りつべけれ。耶麻媛の傍に留き次の間にも五
六個圓居あしたり炉に懸し鑵子の疣を扇ぎて吾を近平に為て
せんるに倍綺りしく目まで靖候縉紳の奥の余勢なりしてかく端るに
ときへあらねど書籍などの上をりん晴に窯しくるその容のごとくにみゆ
とど。さてまた恙怪むべしと必ハ此頃身にも應せぬ。動労も倣ら渾身さへ倦こ
労まて漸くに命を保てるまでなるに心神さらに虚耗せぬ。弊に宗て侍
へゆく。魑魅魍魎の類ひなりして人を貌掌の蓋物に餘らせる老ならんか。

そもそも魍魎は方良とも云ふ。左傳の注疏に川澤の神とし。日本紀にも去る水の神とし。魑魅ハ山の神とせん。耶蘇より入て潮る処実に人跡絶たる深山にある妖魔なりとせん。是我らが狐狸の為ひ何にまれ怪しみ祈祠さるゝ迚断まべきにあらびてと悔わ猶て四きと睹ま附る張を希かりけるを尊下耶麻媛ハ衛と立て次の間へ往くるが。霎時ありて天目に茶を汲ミて立出妾ハ女子のことにして。その縁故ハすくも知らねど唐土にハ三國の頃より茶就べしとぞ。吾が邦にてハその昉め何時とハ定かならず。但弘仁の年のとき大内にて茶の式あり。群臣にも賜ありしと云人ハ言ひ伝ふれども當時ハその種絶えうして下様の者ハその名をも辨へ知らぬ者も多きを近曾諸所に是を植て好事の人の翫弄とあるにあれど土地に合ざるや往々その樹枯失て今ハその世に僅遺ありて用に足ら



珍重なし。價貴く搬く收昇まる老ハ手にも入らで吾らハ僥倖にてこの世に在とも少しおくりを財へ持て現に寶にも換がたれ母及弟が病を除きおかりつとの樣しさにあまた薦めまつれど出せバ近平手に把てまつ歎きら宜ふよく謝く廃の書にもあまたと我邦にも茗ありて奴老の鑒ふほどにかくまどし。信ひ寒よそその地気に合ざるや。因て吾們おまへ人ハ名残ゆかすの喫まるをなし。今その味ひを知る事ハ富貴に周むの僥倖なりと謝して天目の中をみるにその色黄みて山吹のごとく。その香ハ殊に馨しくて他の葉にも似もつかぬ現に貴人も好しくて飲ぶこそ宜なれと心に譽て喫しおえて。その間に耶麻媛は伴平の種よりて把出せしハ金剛娟子の一箇の壺を盆に載せ。とまた甲斐国の名産にて彼国の人焼りす月の象といふものとや一箇菓子に把りて人といふにまりて今教ありし見まで因より金剛娟子の器ハいさゝか曇り

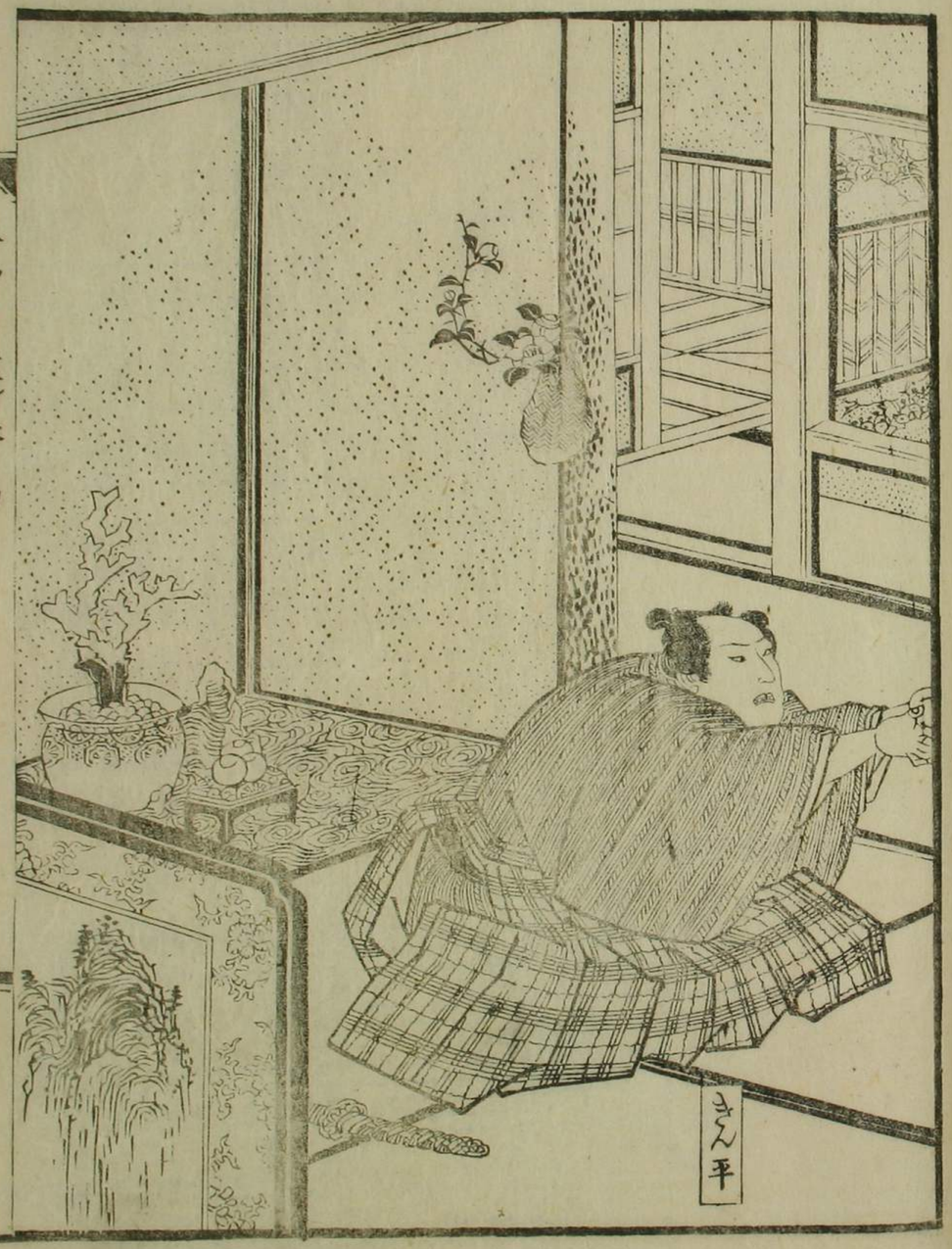
かく。玲瓏たる塵もなりの物さへ眼に遮るに。その壺の視的霊にして色も差明く
思ふまでに。一物のありともえば。這は耶麻猿ぐ世青の。獣人し佛つて期
き矢刃為なるべしと悪く推して手に把らんでその器の光潔なる成賛りめ
まで耶麻猿い筋もく件の壺の視なり。夾と出まくいその圓さ。松茸のごくその
まへ。極めて純白なるのなり。かくて近平ぐ爺に出き。這は蒲萄を忘しく製
しなるのなまで。然のこ孫くしなる花ども。かの壺の人見に絡なる。餘所にまの
品あれば。数のこ頼味ひのくとなるに。近平手にとて懸看とべつに菓子差
ひなり。白き器に白き菓子を盛りてとて其初め物ありしも見えざりし
遠い漢の武帝の時瑪瑙の盃に葡萄と盛り。月夜に楊ひなりけるに。祥に葡
萄を祝るとあり。しかき書に見えるも。猿に証言ありけるし人初め
微笑まるに。なる成咳ふに味ひ佳し。与管称してまと一杯の茶成喫しあり



四を成祝るに。傍の棚に飾し種。まで青に及ぶ品のこ出でいし孫らしと
ふ。瞻望まで。耶麻猿いまるに成祝ぬり。微笑に手所なる妻ぐ器の物数
寄とり。折に入れて集めて。悉皆小児の就び面を見所為にて作るとい成。
吹て近平勝まり傍せまで青に到ぬ者も新れ。物のこと多く獣人に常出
に入猫に利。牛の毒に琴と導る顔に入れて兼ねも要あまとに入い
ありなり。這は服屋とに入りめる人。折とまに何をもて造るるに入れい。
その色の純白にて。実に水精のごくなるまで美なる所あり。顔くに示しめ
しまるまで耶麻猿いまり微笑妻もまくを新り傍れど。這は雲母の一種と
なり。雲母い光とり五種あまり。五色並びに異なりて。多く青とのあるりのを雲
英と名くしに入まと五色並びに異なりて多く赤色成岩絲といひ大色並びに
異なりて多く白きと雲液しのび多く黒色成雲母と名く。但し青黄の二色

ある成雲母と名るものと呼て。這ハ純白なるもの故ハ磷石とまゝ伝へ。こゝ
なの物の他ハ異なるハ久しく土ハ埋めて腐ぬ。ハ久しく土ハ埋めて焦
ぬ。こゝ多きを以て人賞翫ひと呼て。砂ハ成ハ掘獲るゝ。長五六尺の物
あり。成ハ成ハ為るべし。と物ハ記せど覚束なし。世ハ多くの老ハ。番数
可なるもの大なるハ滑雅きなるべし。這ハ岌所山石の間より掘獲る物ハ
作りし巻ハ。心著くやゝと笑ひ問ふまゝハ物識めるハ。ぞく数も積来
らぬ。こゝとハ狭しなるハ。許しなく顔少しうち敲らゝてありけるに近
平ハ手と拱き。手編と言んべき。身ハ動ハ。ぬぐとも問ものとも。巻ハ
ぬハ憑しげなき車ぞう。まゝと此万なる珊瑚ハ仏の色青ハ何ものも
ハあるやハ示されよ。と屢問ふ耶麻猿ハ。開ハ琅玕とゝるよし。唐山の崑崙
山と西北の山中に稀ハ獲る物と呼く。俗ハ人青瑪瑙なり。従来珊瑚と

同類ゆゑ海と山との差ひもなべ珊瑚ハ赤く琅玕ハ青く碧の色あるなりと
呼て近平堂と徴とゝるゝ。然あるとも王侯貴人も輒くハ需めゝ。ゝ変ハ
るゝこゝ仮初の玩弄ハ微しなるハ。身分ハ生業の幸なりけるこの餘服
別ハ品ハ成逸ハ問まく欲せもどゝ祝もも太く更くるハ心なしゝ。ハ出されん。
折ゝハあゝハ後ハとゝ示ハと滑めと金釈して暇を若て退んとすゝ耶麻
猿ハ侍女ハ指揮あるて廊を彼方此方ハ案内して頓て処なる鍛打
問き。沢沙の鈴をゝりなゝ。ゝ応と同巻ゝ。ゝ出るハ老僕の烏威引板那ハ
て後ハ引副ふ両三個金一容ハ額著て中ハも引板那辞を異らゝ長途ハ
労まのひゝ法想像あく主人の妻ハ悩める成ハ心なく宵より労ハ糸
らゝゝハ謝まるハ辞もなくハ。さまゝ聊か労まる成慰ハまゝさん為先刻
ゝ。その果るゝと候糸らゝハ成ハ一献酌ゝて寝所ハ到ゝ。ゝ


きん平

やまぬま
耶麻媛
奥院ゟ
近平を
召應ん

小里見八額と接否物欲うもいそび。その屋志小辱なけとど今宵小このまゝ
甘ぎに慰こゝ〜しの〜程小开小賓客の隨玄ゝと鉄のこゝ小遥び苦来些方へ
と寝の間へ紫内せんとん歯下件の後にまで伴ひ来る侍女ども異口同音
小賓客よ寛〜慰このひれ。し服を苦て戸に紙頻一動也ゝ〜走りゆく里
見八鳥威引板郎ゆゑ紫内小ようゝ客の間の上坐小ゆけば床敷伸へ枕の方
小屏風を建その外小枕大あり。引板弟ハ今〜狀して則焉ゆて慰このゝ大の
次の間小両三個の僕ゆ共肤らしい敢備夜中小用あゝぶ掌をうちゆらしの〜
とゝ近平ゝと皆の秋待を遥〜謝せんも煩ハけとべゝでよ程小今〜狀して。
屏風をゆ〜きとゝとゝを見るに純ゆの横小綾の茵褥ゆて清らゆある景勢小却
て心落れれど掃ーゝりとも益ゆて。と引板弟及び人〜小暇を苦て歌こけゆ。
渾身い疲労るりのゆゝ。左や右しゆりい廻せば更小睡小就ぐ〜瞼さへ今



びゝて。ゆゝ小ゆ大の家の為体幸毎小疑ひあり。何とゆも魑魅魍魎の類ひに
あゝずゝ狐狸の悪ゆ共小究まりゝう。備然もあゝぶ何時まで〜人ゆ戯嘗ひ
とと溝ん秘明小至ゝべとの色と草泳き野しあゝん必せり吾心神を悩ま
ゝ〜その虚小亦て遠ゆ小躰入まとれる念あさよし獨揚を熟せども今
きゝ〜さゝり沉概もあさ小筋をるんべゝ小ゆ歯を切て心と配て四
方を熟瞰望るに彼方の長押小清らゆある一面の額と架てその西隅ゆ亦
凡ゝ〜ゝどとりゆるりのゝ燈大のゝと幽ゆて鮮明あゝねど瞳と定めゝ
祝るゆ。低中ハ都て山嶽少て或ひい鉾のごゝゆ夫て素のごゝに屈曲せる其
中央ゝり白雲の簇ゝとゝゝり嶺ひて夏雲奇峰をるんしい人容小似ゝる
がその雲中に晃冠を載きゝ〜ハ全く唐ごの王ゆゝ〜ゝと遥しき渡馬小跨
がり。虚空を斥て奔ゝゝりその他ゆハ一抱ゝ〜先ハ何ゆの図ゆゝんと壮

裡ハ考ふるに忽地ハ必ずあるべし。傳へ聞く周の穆王八駿とのゝ名馬を得て四方に行て千里とあんあを以て恢愛し勝ゝ名跡を地廻りに至らざる所なし。然るに一時化境へ到て看んと志し。彼八駿ハうち猜て崑崙山に騰りつゝ竟に西王母の宮に往きまれ王の奉る所多くよりも王母い牧士の美女を伴ひ。共に飲宴して化境の楽をと究むとのゝ。その國に旅ひあるべきゝ。萬とゝ見て遂へり日夜飲宴ハ今宵の果勢をの赴ハ遥ハ遠きゝ。ゆきとどこの身従来土民ハ平生ハ藜藿の羹を啜りて腹ハ充る分の珍膳美味を餐應すと牧十の美女ハ冊を居ハ侍朝ハ額ハ珍器を捧ゝ持ゝ。実ハ化境の楽をきく劣らずや。ゝ。ハ此の額を挂るゆまゝ偶然なりと微笑してありけるゆゝ。浮渾分の疲労しまハ。疲るゝ。ハ前後もわゝ熟睡あゝて時を覚えず不図眼を開けば

見ゝと朝日既ゝ高くして辰の刻も過ゝ。ゝ。ハ疲れて反起れば。そもゝと看るより下僕ハ賓客員覚の人ハ。昨夜ハ疲れの人ハ雨戸も繰て寂ゝハ家すべゝとの主人が分身ゝハ則ち腹ハ化人もあるべきれば何時まで歌ゝ。ゝ。と曾て厭へるゝ。ゝ。ハ信ずるゝハ近平ハ微笑して労まゝ太く朝疲をのゝ。井戸ハ行水と問も果ぬハ大きゝなる胴の盤ハ温湯と渡く汲ゝ水ハ柄杓を添て来ゝ。ゝ。ハ嗽ひ。ゝ。と鄙鹿の多見ゝ。ゝ。ハ信ずるゝの好奇を秘びゝ。昨夜ゝ。ゝ。ハ妖怪ハ翻掌まゝゝのゝ人と十分疲ひ。ハ今ハ旅ゝ。ゝ。ハ決して然るゝ。ハ実ハ奴の豪家なり。我必不思ハて故郷とゝ。ハ退ゝ。一銭の財ハ。今より何方へ立帰ゝ。その業所さへあゝざるハ不測ハゝ。ハ来ゝ。ハ不幸の中の僥倖あり。暫くハ足と狂ゝて後の便宜を

計らん。しばし旅宿に沈吟のありて。この家の主人早苗公。さきの日より
のぶと再び厚く謝し。実に和君が術をもて妻晩稲及び三郎も今新たに
中病癒て食事も平生のごとくにかなり。只管にその鴻恩を感じてとそは
ものを統て些少その報代を。為ひべきと存ずるに。折和君はあまたより
して。何方へ立越のぶにまた故郷と呼及ぶ。信濃へ飯をもとにたりとも。
程と兼ね。都て便利よろしきやうに計らんと存ずるなり。若しかくばは若
のぶとの上に星見は今報ずして必ひ挂なく。昨夜より稚くの歓待その身に元
まて功に過ぎる報代あるべきあのよに謝物と文人。その議は許しあい
まよ。偖在下がこの後の成行き。所詮故郷へ帰る身なりべきまでとて何
方の郷へ従んと必ず要所もあり。雲水に任せ。諸国を遍歴あんべしと
必ひ決めていしとべば十代田領て。然もかくんあい在下が郷名へ折あり。まづ

暫くこれが家に見を注めるべくしてし。悪者に対らひまうさど。とくと信実のあ
ものを津に私の心地はすまとど。老らばといろりもろ得あるべ。辞して退らんと仮
しけとど。早苗公は強に何久に若しくるべきと留むる故にその元に任して。
見より且く逗留あんに彼三郎は朝まどきより僕者と対身に武要を
励み昼よりは墳墓しとぞ。に解る容もあるべ。年に似げあるき怜悧さに。
近平心に愛ぶべて折ふにその傷に出剣法などの対所をすに渠は
なさく衆人に。勝まる藝とらひ力量さへも余まあまべ。平生に三
郎が対身とあ。僕者は絶てその右に出るとの雅き武勇り。評のごく尊
敬なる教成文人とあ程に指めて七あと今は大や辞こ雅て近平も不
異に陣茅の思ひを做し。なる道として怠慢なく見ることを厚まんべど。十
代田もまこと見と歓び慕まべ指ゆより一個の武人と思ひこうしも差は

ざりけるを世間に渉ハ寒郷の人名ある人ハ訪のも素び武藝万事と習ふ内の
ありとあらゆる師友ハ交わく世ハ所謂因循物の要ハ立りの解一里見が
藝も名人上手の域ハいあらぬと見ゆるまでこの道ハ並ぶ者なく久しく
ましてこれ程めでたく青春名ゲ師とあるさば自他の僥倖あるべしと思ふ人々旅
ハ愛らべ鹿男なくこと今数ケ月かく月日の過安く十日五十日おの
ずと過て皐月の中旬となりけるゲかる山家ハ暑もまぢ落く殊ハこの頃
ハ微雨そそ降ら日も程陰に勝ゆ人の心も伸やかしび近平もこの程
ようやくの時候の僥ハ心地も平生ハあしれとて引籠りありけるゲ
今日ハ空よく晴さらく山の殖出る月の新青葉若葉ハ障らとなく見々
しき景勢ハ絶ずもうち同き様の色ハ殖出て彼方此方とうかり
ゲ返など成ひまりんハ我身不図もこの家ハ長閑きとて心ハ易く愛



ものなきハ就ても西條父子ハいつハ忘りけ縁ゲ吹く業ハの見石ハ雅ハ
く到るとそとき心ハ懸とどもあの身も既ハ知孫の廳と嘆しくるのこと
あるべ荒後主従その揚ハ死せば上ハ双向ハ朝敵の名をば負ともつひ解く
術あるかとば漂蕩近國を躊躇らんハ禍を自ら招く道理も忽漫ハ依
処も弱ゲこと雷ゆ殖ゲ伐僥倖ハ此家ハ潜まば安泰とまづ身の備をば
あくくに姓名ゲハも彰ゲ仮ハ里村珍平と名ハあるとど何ぞ迫
ゲ此処ハあるべき身ハもあるべ近きハ此処を辞し遠くまて遠く奥羽の方へ
奪て時の難易を計るべしと沉吟仮しゲありけるゲ朝ハ夕風の秋
原しく心地さへ清くもなるべ文処ハ有あ庭下林履を徐々と立
出て彼方此方をうち看やるハ遥ハ庭の奥の方太刀打の音ゲうる程ハ
好る道して床もくるひ足の進むも覚えまで青ゲ導ハ奥庭の口まで

徒て窺ふに。都て女の姿青なりしに於て。近平ハ偖も不思議と小首を
傾け。案内定かに知らざれど。思ふに此処ハ耶麻猿が身て庭後きと覚ゆる
なり。女なりしも面魂凡者ならずと思ひこなしが。彼大勢の侍女等に。飲酒
なども勧られにや。心惚しと思ひハ墻の辺に身を修て。裡の容子を窺ふに
折の時月ハさし昇りて。にきを限なく照せども。捷篭の樹木茂りて。殊に間も近
からねバ。さしもに其の辞ハ是を聞え。只此應の挂声ハ手に把るばかり聞えけり
近平ハ奈何にもして其の容貌看まく欲し。何まり近きと墻の外面ハ彼
方此方と巡て見るに。ある所に庭口の栞戸。風に靡めきけり。僥ハ此処こそ
開てあれ。幸ひなりと推開き。徐とゝも入るに。左右の木立ハ森然と松
栢枝うち交し。根ハ其の名もまだ知らぬ夏野の草の生ひ茂りて。雑
さへ定かならざれど。僅の径をつけて月の明りに劉りつゝ。次第に其

傍に近づく頃。思ひもよらぬ前後より。顕はれ出たる其五七個。手々に棒を
うち揮て。你僻者なの夜陰に忍び入る。奥庭傳ひ窺めて。竊にせんと
なるべし。其処動くなと襲挂て。矢庭に捕めんとすれば。近平嗟やと身を開
き。卒爾なまさしと嗔れども。彼ハあらず。吾ハ里村珍平とて。此家に客たる浪士之
月に紊れて彷徨し。木太刀の音の床しさに。幸ひ垣の扉の開きたる。案内も
知らで入りたるハ。己が過なる。咎めらるゝ。努々賊にハあらずと陪禮ど。可ぬ下僕
等が。なほも左右に纏りて。珍平刀禰ハこの日来。心地悪しくて引籠り居給ふ
よしハ噂に聞けり。汝彼人の名を偽り遁れんとすとも遁さんや。乞尋者に索
ねまゐらせ。即坐に撃伏せて辛き目見せんと。ひしめきつゝ再晃かし。六尺棒
近平ハ身を沉まして。霎時ハ支えたりけれど。透間もあらせず撃かゝる棒ハ宛
然電光の頭上に閃めくばかりなれば。遁ハ狼藉と一刀に手ハ挂たれども

又ハ渠等ハ總て十代田ノ僕あるべきハ止てゝ濟んしゝとも又物三昧怪我
めゝせんも快うゝび御こゝめゝしゝえる此方ハ蒼稲竈を祀りあり祠の
前ハ樹う華表高さハ九七八尺こゝ屋竈と鍋手を挂け力ハ任ー曳拔
くゝち来る捧げうけ西の横さ広さ蘆り立てハ件の僕等ハの卒
事ハ惶もて一度ハ蹤巡傍著くゝりのもうるけり

## 第十八回

女兵を繰て雄性を試む
危難を避て十代田ハ舎る

裳下向ひの方ようて綾くとゝ立ち出る女こゝ一容ハ白綾の顔巻をして
髪うり丸ゝ式ひ搭箱絡箱しる。あるゝの華美衣裳紅の指引ゝて襟
ゝば高く端折あげ帯絡の鞘ハ白糸覇の太刀と横佩樫木ゆて造りし
薙刀ハ脇ハ捻鈴ゝ一隊五個の列を敷き前軍後軍四五十個その中央

ハ立ゝる。金銀の筋月前ハ輝きゝる兜頭巾猩々緋の陳羽織ハ縫珍
の野袴麗めゝ月ド容ある太刀と佩き麈配把て徐ゝし歩行出るその
弁相男女の慌も分ゝ程よき所ハ隊伍を止め先ゝハ年の齢二十
四五ハもありゝ人色白くゝて眼ぎゝ後目ハ聡しゝえざゝ清ゝハ
しゝ乳高き女進ゝ出て麈張あげ何者ゝば秘法ハ及び无用の者入
ゝ式許きね庭へ忍び来る。大膳亮数の僕者ゝ偉ゝる僕等ゝ数ゝ
まゝ行方まゝ捜んとすハ頓ゝ縹緲ハ如ゝ偶薛むゝ手ハ見
せねゝゝとのひさゝ持ゝる木薙刀把走ゝよゝえゝるゝ虚空をゝらゝ打
振る手煉ハ現ハ目覚しくも見ゝまゝゝり星見ハ心ハ領きて持ゝ除華
表を戛ゝてゝうち捨蹲きて袴と微ゝ見人ハゝてゝハ耶麻猿四寮ゝ傍ハ
冊く侍女衆女ゝぐゝもその拳動ゝぐ感心の他ゝゝ実ハ在下ハ里ー村殄

やま
耶麻
ぞう
娘の
いち
一
けい
計
ゑて
近平
ちゑを
試んを
きん平

平数日の恩義をうち忘れ何者心と含むべき太刀打の音床しく奥庭
ゞとも聴へ初しを奉のうしい迫なる紙番の人々紙かりとして撃んとする小徐
義なくも支えしまじ光柳も思心を拘くふあゝび許きせるへと陪侍け
まびあの時伴の中央なる兜頭巾と頂戴なる人は徐歩行傍の兜を脱ば耶麻
援かり莞示とゝん星を小對ひかるべしゝふ新ゝびゝん僕等が先祖は用捨
あまと伝家秘の紙かりとも〻で一個と捕へんとゝかゝ暮々ゝき拳動と脱病
かりゝと笑ひもの且怪しとも必さんが見ら為ゝごくこの廻は必ず人家は
稀ゝ殊小廣らなる莊内の構へ墻壁とも小厳密なゝび動もすまじ紙
の為小犯さるゝゝ屢かり曾この須土地の人の話説小吹ば岐蘖山小寨を
構へて柄む賊あり名を何閑梨とゝまゝひゝ徐の統領両二個各方
夫不義の徳者必ず下風も多く蒙しゝ蹤為ふさのこ親近ゝねど。

三日必ず従来きべし然まば中々小波ゝ及ばゞ侍ゝ
ゝ小為難刀の一手ゞも習ふして尊ら不虞の備へとあん。ゝ小為ゝ
ゝで一個と偽ゝも外面小多く寝ふこゝあり。現小も古人の詞のごゝ玉小盗紙都
小亂ゝびせ兄者の限あり。ゝうち微笑ゝ里村ゝ。ゝ後は絶て面も合ゝび只山
名紙吹のこゝあゝ和若ゝ武術この渉小誰ゝ及ぶりのゝゝん。と父も賛ゝ
ゝゝき妾女の身ゝゝ小若兄時ゝうゝてゝと好こ入ゝゝゝと父母も嬢練ゝ
伝まゞも今ゝゝ術も弓新孝ゝすべき世小ゝゝゝわゞ夫名紙法て辞と做し。
侍女ゝ小ゝうゝて明暮ゝて紙楽ゝふ。做ゝりのゝゝ善き師ゝゝゝ徒
俳和若ゝ世小稀なる業ゝゝ吹ば慕ゝゝ積ゝゝその教を受ゝんりのゝと古の
稚も父小低語伝ゝゝゝ男女ゝ席と同ゝせゞ做さゞも済ゝゝ業の為小ゝゝ
文らんゝ善ゝゝゝと言ゝ小ゝうゝその侵小止ゝすゝゝども三郎ゝ日毎教を受

侍るを羨しそなれ時も有り。然るに想ひ図らんも今宵こゝに来るひつる頼ふ
ハ一手の太刀筋を教へ給へ。と侍女共に指揮
して床机を出し近平と。其処に居らして温湯を勧め月の明さに昼にも勝
つるぬ。乞々しく稽古。近平ハ額を搔て在下性来愚蒙なれ。なむ物の道
するとなり。この日素懐かくと厚き恩を謝せんが為。三郎君の對面を
し給へ。偽紙二ツ三ツ言葉遣ひて争ふ人の師しるを潜んこの旅に行る
きを見へ。こゝに人に耶麻援頼とうち揮て元来甲斐なき女子なれ教へた
りしその稽古をしとそなれ。ハ宜へ。こゝん遠ハ情なきを心ぞや女ハ五の
障あり。成佛しがたき身にあるとど。大覚世尊ハ悲をりて八歳龍女
ハ解脱の玉。一切衆生自他平等ハ慶大死道の徳なるべし。傳へ聞く吾
邦の神祖天照太神も女神なれ。波らせ給へ。良弓矢を執ひ六合を

治めひの。故に世々の帝に女を五人まで。然るに女子なれ。流に能
棄つべきなるのゆへ。中古上野の片名が妻。良人に捨られ國敵と遂
けるに例もあるぞ。女子に入られ武芸ぞと一偏に八雅けん。かく言ふ
師と憑む人に對て怜悧く。先祖なるものと愈賢のゝ人ハ忘れども
なるとてやすに止ぬ。教へ給へ。教を受ねば師弟ハ
ら。五に励む修行同志吾薙刀を受へ。と云ひ突出し木薙刀近平内
りとうも素て飛ものゝ。身をかゝ。此方ハ下て教授ひあげ。左手に把
ふ薙ぞ。人勁捷七の勇者。ゝ況や星見ハ不意と撃まて。身に一
寸の溝物も持ねば。彼方へ躍り此方へ避けて。鋒を防ぐのこと更に論
方めゝ。を溝ゝや應と耶麻援ゞ。美入る薙刀支えるね。支起る麻机
を搔揚て且く文元爭ふを。漫て寸に耶麻援と。交うけ出る別

人々しべたの家の主人早苗分とぞ見るより耶麻猿い跋巡て薙刀杖
ホ突き手と動くさ移バ近平ホ。やをそく床机と倚ホ知。早苗分ホ今釈
すとバ。早苗分ハ近平と強て帰ホ就ある。篇より下僕等及び耶麻猿
和殿ホ対し至極の无礼。今さっき言解詞いあけとど。是まで奴あれを
ホ申めしべ在下分人処ゆて疑ひ晴きとよ。和殿ハ信濃の春名べ
冥村珍平と告るとど目偏るべし。この頃祥馬の玉府より一通の秘紙到
来せり。抜きて見るに潮平の和孫荒磯猪八郎。その餘家人を軒害し立
退くる妻所の浪士西條重太郎高純ハ年齢凡そ十七八歳。その父なる高
資ハ深痾を負て家ホ死せり。初てその震実見近平。這ハ年齢二十五六。
容貌粗猛形しべ。その婦より従方を初しべ閉て逃ホ搦め捕る。玉司陣
代ホ注進あるべ。貴ハ望ホ應ぜべ。この由洩さべ解示せと。玉司より

厳命あり。閉て倩こと想ホ和殿の相貌一点差べ。然れど不図も鶏
鳥の懐ホ入ると。争う猟夫ものと捕べき。然とバ此方と潮ホ通ドたの
所と立退とよしハ普通の所為ものど妻子ハ世古より親王家の要
領ホ仕る人玉府ホ下り。政務べ執りのべ。總て親王家の共る処
閉てあるとのホ於てハ除ホ及ぶ恵遠くまと緩寛なる所あり。然
るとかる厳命あるとバ。凡そ北陸関方の徒ハ極めて穿鑿の厳しくて。
是と容るの地ハあるべ。開方と初りなべ。この家と逐んとハ本意なべ奴
ホ居と詰合ホ。初めて和殿ホ対し。御聴云ある貌ホ仕ると長量の
ものと親く試こ。つまべ人ホ差ひるべんば。この家ホ注めてその禍と免るとー
めんハ。易しと。偽こと和殿と陵し。旁せ根のなるとと曰り立て術と試
ホ必ひきや。安倍の比羅夫ガ再生るべハ焚崎周勃ガ朝へ渡り来

しかしながら力量剛く勁捷の術にさへ闌なりければ。干戈おいて容易を
若舎蔵人とありし。和殿の心ハいかにぞやと咳て星見ハ吐息吻き額の汗を
拭ひもあへず。かく明らかなるうへハ。今ハ何をか畏むべき。察しの通り在下ハ。
里見近平と呼る老潮平の和孫を喋がし。直にその場を立退るその事
実に相違ハなけれバ。甚その範る所ハ。簡稲くの稍にあり。和孫ハその威を
遅れずして西條父子を陥れんと謀るよりのことなれど在下ハそもそも其
絆に拘はるべきにあらねど。重太郎が父高資にハ既に師弟三世の契
りその弟子の多かる中にもとり別て慈み深き恩義をうけしより。いづれ大
事を除所になさんやと命を捨て荷擔なせしも。只義を重しとするのことなり。
されど今更擒になり。仮令刑戮に遭ひても。卅を歎くべきことにハあらねど然れども
西條父子が生死存亡定かにせざれバ今の仲をもて名へ師の高資ハ深涵



にて果しとハ然もあらし。重太郎ハ年こそ若けれ天狗童子と異名さへ
驕らざる猛者なれバ輙く捕へられまじけれど今ハ何方にかある怨べるその
安否を知らねバ同じくハ死に就ん在下もかならず彼ら厳に穿鑿
あれバ重太郎こそ想像るに夫下らしく上を凌ぎその羅乱死に暴るゝ
ものども上なる人臣正しからバ芭苴を貪り偏頗て邪曲非道を己が任と
なし。ことをもて人心和せざれバ。その威権を恐るゝのことありて更に低伏の色あらず
ねバ。一たび乱るゝに及びてハ屋の瓦を壊のごとけん危うき世にてこそ然
るとかゝる混雑に居をトして他に交らバ。善にも就人悪きにも偏らずして安穏に
住ることこそ愛ずけれ。さる姑息の仁をもて在下が身の大難を拯ひなく
んその大善功徳をしまずで不孝くハ忍への為に倫連累の難
なかりける蔵もなき素浪客一個の救に牧代の家名喪ひなりん是も又

要る所業しの人々を見ずこの身ずに於て万劫を経ることも罪の滅ぐ〜現ずも
父子の人々が情ずに悖ずに従ずど今より暇の行まう〜死生存亡天ずに任して
何まの他へも立退んず還て己が心易うり嗟ず懸も数日の程鴻恩を棄
まずしとる辞を設て謝し難し在下備も運命強く僥倖ずして綱と遁れ修
羅の巻ずに呻吟ぎく後ずに来りて恩義を謝せん今まで〜こそずに知られもれ既ず
この緯発見て〜ず須臾も安情ずにあぐ〜。その故いとの家ずに召使ひて間人
多きが中ずに利を貪る族ありしずに人べうべ備るの人の耳ずに入らば忽地緯
の被まを生ず後悔まるとも及ん難きぞ今より辞し退て疾の間ずに境を
出んのこころずひり立を早苗ず遠ざく推開めのそる所こそずに道理然るべ〜
充ずまよ在下年も耳順ずに及び心慮ずくやかしの人既ずに孫と嘆しる。
罪科重しこのひあ〜和敬ず正しき本人あ〜び。まこの配紙ずに云の法を

執とりて〜この色まで鬮示さる〜老ぎべ〜。その除の穿鑿めるこの殊ずに在下
が指揮ぎせるこの一郷ずに悉く懐き靡きて叛ける者ずに一両輩の他ずに生び。
さまびこの家ずに何人を金蔵あ〜ども夫をして丞府へ注進する者あ〜び然
ぎべ〜天地も測る量り難きず人心備も不良の人めりて所へ〜ず業下ず。
密ずに和敬を立せんの三家名ずに假の善こと〜ん。夫考ずに累も念せび注ぎべ
利ぎべ〜和敬が今の一言ずと勇まし〜あり〜。雲井ずに騰る龍すも流
ずに満る時節あり。窮達難易を知るとも〜。若〜と称へ雪老し喝ぎべ〜。その
剛ずに誇るとも〜暴虎馮河の徒し酒むぐ〜必維しの人〜。説きて近平手
を拱きこまで沉吟の美ぎる容ずに耶麻猴ずに進こ傷り。和敬備心を決し。その
家ずに潜くめ〜んと〜功をなりて〜その羅を購ふ〜元手段あり。開ずに和敬が
力を假び一拳ずに仕課まべ〜。その緯首尾よ〜るべずに於て〜羅を購ふのこと〜

やまひめ
さくらの殿


きん平
里見近平
十代田
父子ホ
身の来歴を
説く

び。世ホニ五宝ん端るべしと。吹て星見ハ欽然と。仔細ハ何ゥ存ぜもど。不肖ゥ
死ホ應ぜることあり。一ツの功ホ〻〻〻〻と。粉骨碎身仕ま厭ハん。さぐ命
ホ隨ひ人妻時ハ世家ホ濫りゥん。万事ハ宜ホ計ゥこの〻と。額黄のべバ早苗分。ゥく
ゥく顧きハ面ホ及ぶ。新心ホ労さゥと。佛此配賦の若ホ就て和敬ホ精く〻同て
ゥり西條九郎高資と云ふ。年齢幾于だゥり。まこ若きより潮平に住ける人を
ゥの妻子ハゥゥる面辨怜好ぞ精ゥ。ゥく〻まゥ〻〻と。同ひられて近平が陣の高
資ハ年齢大ゥゥ六十ホゥりぬ。元来彼処の産ゥゥ〻〻ゥ。十四五年
間ホ彼地へ来まるゥ。在下ハまぐ雑ゥ。その世のゥゥゥ。雑へぞ。その頃ゥし
て妻ハゥ。婦ハ系托ゥ。今年ハ十八。第ハ則重太郎一歳劣ゥ。ゥ十七ゥべ。ゥ餘
家族ゥハ者ゥ〻。その素性をゥ。知ぐれど。元ハ然ゥべき武夫ゥりけん。文武
道ゥ深ゥ〻。折ホ觸て吾们ゥ教訓ゥる事毎ホ古事ゥ引用せざゥハ。



ゥけまど。彼地のゥき寒郷ホ濫むゥて。村学究ゥも持囃さゥ。唯一生を
匿々ゥ〻ゥ。遂ゥるのゥ。奸佞の。知絲の亀ホ邪業ホ死ゥもゥ。天命ゥ。
語ゥ畢ゥて。懐嚢の涙ホ咽びゥりけゥ。早苗分ハ然然ゥ。空霧時ゥりて
ハ。ゥ〻ゥ。偏ホ禍の物ゥ。ゥの記ホハ。ゥ涙ホ一天暴ホ晴くゥり。ゥ怪ゥ射
ゥ〻ゥ。征矢。知絲の佩ゥ。行勝ホ立ゥ。ゥ害心を抱ゥ。ゥ〻ゥの疑ひゥ。
ホのゥ。ゥ及ぶゥ。ゥ〻ゥ。ゥの翌の夜の暁ゥ。ゥ〻ゥ。ゥ須ゥ。ゥ〻ゥ。
不測の夢。今ホ於て。痒ハ解ゥ。ゥれど。その重太郎高純ホ遂て面色怜好ゥ。
ゥホ至ゥバ。新ハ分解ゥて。ゥ〻ゥ。元来果敢ホ。ゥ妄想ゥ。ゥ人ホ語ん
ゥ〻ゥ。ゥ〻ゥ。心ホ不測ゥ。ゥ人ゥ。ゥ〻ゥ。ゥ〻ゥ。懐の耶麻猿ゥ。先須ゥ。て折ホ。
ゥの夢のゥ〻ゥ。ゥ〻ゥ。如此ゥ〻ゥの精ゥ。ゥ妻ホゥ。ゥも若ゥ。ゥ最果敢ゥ
ゥ物ぞゥ。誰ゥも知ゥ。ゥ〻ゥ。昔ハ変化祥ホゥり天子の位も禅ゥ。ゥ

事さへあるあるとゞ九る所なく死者のもかゝゝと今育ハ他ハ人もあゝ侍女ハ
ハ彼処ハ慰ゝ下僕なも疾逃るせぬこの折とゝ四夢の稍と具ハ語り
ゝ尾ハ純く近平も勝と進ゝ在下ゞ素性未歴身ハ犯せ羅れ
ゝ分毫も畏むて安く明ゝ行末憑こ赤ゝ寒ゝ股肱耳目と必
ゝ方ハ心と置のハ在下もゝ君の為ハ身を碎きくも力と赤ゝん。
ゝ係ゝ人ハ先早苗分も耶麻猿も訪ハ笑と合こ現ハも偽の
ゝ死人ゝ人ゝ故ハ死禍ゝ故心を引き止めゝけ甲斐を
ゝ故未ハ親ゝく交ゝ吾们初人ゝゝ人ゝ人ハ大望
ゝ夫者のゝも逐一ハ語ゝく和殿の智と假ゝ。まゞ一盞と頂けゝ。ゝ爺ハ把
ハ世ゝゝ酒ゝ殺と引ゝく人。爰時ハ醉を竭ゝけり

善知安方忠義傳第三輯巻之四終